

中国自然歩道 氷室（風穴）

丘陵にある、この苔に覆われた石の並ぶくぼみは、人間の独創性を自然の冷蔵効果と組み合わせた伝統的な冷蔵構造、風穴である。夏には、山の上層部が太陽によって暖められるため、山中の冷たい空気が下方に流れ、丘陵の多孔質な溶岩の割れ目を通して噴き出す。冷気を閉じ込めるために作られた構造で、内側に雪を置いてたたき固め、氷を成形していた。冷気が絶えず山から噴き出し、その構造内部を夏中冷やし続ける。

風穴（ふうけつ）は少なくとも 17 世紀には採り入れられていたが、1866 年に長野県で画期的な新しい使い方が注目された。カイコの卵の輸出販売が海外で失敗した後に、返却された卵が地域の風穴に保管された。その年のカイコは晩春の霜による打撃を受けたが、生産者が保管していた卵を持ち出すと、冷蔵していたためそれらに影響はなかった。この発見は日本の養蚕業にとって革命的なもので、絹生産者は大量の卵を保管し、年に数回生産できるようになった。

この大山風穴は 1911 年頃に作られた。毎年晩春に、ここに保管されたカイコの卵は馬に載せられ、米子へ運ばれて売られた。この風穴に入れていた雪すら売れた。「大山氷」とラベルを付け、地元商品として高く評価された。大正時代（1912 年 - 1926 年）中期までに、冷蔵庫が商品化され一般に流通し始めたため、風穴を使うことは減った。ここにある構造はその頃に廃れた。

しかし、風穴は短いながらも再帰した。2011 年 3 月 11 日に福島県で破壊的な津波が起き、大規模な電気不足により計画停電が行われた。その際生産者は再び風穴を利用してカイコの卵を保管した。